

●「海」（福岡県）18号・20号

「海」はこの福岡県の「海」と三重県の「海」と、二つの同人誌があり、どちらも実力のある作家が揃っていて、読み応えのある内容となっている。「文芸思潮」今号のまほろば賞優秀賞の「刑事死す」（宇梶紀夫）は三重県の「海」に掲載された作品であるが、福岡県の「海」にはまほろば賞の井本元義氏が連載している。どちらも一〇〇号に近づいている伝統の重みを備えていて、注目すべき同人誌の雄と言えらる。

18号の有森信二氏の「万華鏡」は、一九五〇年代の農家での幼年時代を生き生きと描いていて、当時の世界が鮮やかに浮かび上がっている。主人公の美奈と弟の喬を軸に成長していく子供と、変わっていく社会や教育とがうまく綾織られて、戦前の農村を引き摺りながら、経済成長の時代へ移っていく過程が、人物の言葉や思いに溢れて、よく伝わってくる。サッチャンという体の弱い女性が漁村に嫁いでそこで子供も産みなんとかやっついていく姿も、その陰影で子供たちの心の中に引き摺って深く残る。当時の姿が鮮やかに浮かび上がるその鮮度において優れていて、最後にサ



ッチャンが残した万華鏡を二人で覗く終わり方もいい。ただ、惜しまれるのは、せっかくなので書いているのなら、その万華鏡に何を託し、何を盛り込むか、作家の世界観がもっと深くこめられたのではないかとこの不足感である。幼年・少年という一時代の、もう決して帰ってこない、命の輝きを帯びたその世界を、絶対性の時間の中に浮かび上がらせることができたのではないかとこの惜しさが残る。最後に覗く万華鏡の光の無限の模様は、サッチャンが暗示するこれからの実人生の美しいが不穏の未来として象徴すると同時に、ここまで生きてきた幼年の牧歌的な豊饒の世界としても照射することができると、この世に生きる底を照らし出すものとしてもっと活用させることが、この作品をさらにレベルアップさせる鍵となるだろう。難しいが書き直してそこを深めることができれば優秀作になり得る。

井本元義氏は「静かなる奔流」を長篇として連載しているが、いくつもの試みを展開しているものの、文章がややだれている。華麗な切れ味を出す舞台設定や人物設定をもっとしっかり別なところに求めるべきだろう。

もう一人の実力者牧草泉氏も「浅川啓子の場合」を連載していて、痛を基軸に問題を孕んだ展開を見せているが、タイトルが示すように、もっとテーマを引き絞って、追い詰め、滑走から飛び立たせていく作品の自立性を図るべきだろう。「〇〇の場合」の〇〇には、だれでも持つて来れそうで、絞り込まれていない印象を受ける。この連載には何かありそうなので、深めてほしい。

●「月水金」（神奈川県）42号

「安保物語―新日米安保可決成立―」（松田一宏）はこの



号だけで五〇〇枚近く、全体の連作を合わせると二千枚にも及ぶ大長篇小説で、これに費やした労力を考えると、頭の下がる大労作である。たくさん資料や参考文献を読むだけでも、たいへんな苦労であったことが推察される。もともと六〇年安保がどういうものであったのか、それも知りたくて読ませていただいたが、とにかく労作であることには敬意を払いたい。そのうえで、感じたことを率直に述べさせていただく。

よく調べて書いてあり、当時の勢力や事情などをうまく取り入れて状況を再現しているが、何かもう一つ生動感がないのは、なぜか。国会に押し寄せた力は、ほんとうにこういうものだったのか、完全に説得させられない不消化感が残る。たんに学生運動や左翼政党の動きを書いているだけでなく、当時の自民党内閣の考え方や方向をも記している点など、客観的な複数の視点を提供はしている、立体感も備えているものの、主人公とその周辺の人物が、内面を反映させたり、全体の動きを感応したりしていないので、高揚感が乗ってこない。ただ、当時の外国関係の状況やアジアの周辺の事情をも汲んでいるので、なぜ日本の中核がこういう選択をしたのか、その成り行きは知らされる。最後に主人公たち学生の一部が、国会の決議の後、首相官邸に殴り込みをかけ、首相を前にして問い詰めるそのシーンは、功罪両面を見せている。こういうフィクションの結末

を入れることによって、当時は考えられなかった可能性を示している点は、積極的で肯定するが、結果的に岸信介の覚悟に圧倒されて矛をおさめるのでは、何のためにたくさんの学生が参加し、犠牲になり、あのような騒ぎになったのか、反対派の努力が霧消してしまう。政治家としての岸を賞讃して終わったのでは、不毛感は募る一方である。安保に対するもつと冷徹な視点が必要だったのではないかと思うし、その結果が今日の日本の体制をも支配していることを考えると、重要な物語ではあるが、何かが書かれていない空白感を否定できない作品である。いずれにしてもよく果敢に挑んで書いたという努力については、賛辞を惜しまない。

●九州文学 (福岡県) 44号

この号は九州文学としては目新しい題材の作品が集まった。最も眼を魅かれたのは「狙撃」(園田明男)である。これは銃を撃つ側から扱った珍しい素材で、つい引き込まれて読んでしまう不思議な吸引力がある。実際に銃を扱ったことがある人でないと書けないリアリティがあり、銃に対する知識が身につくだけでも、読む価値のある興味深い作品だ。特にライフル銃の知識は、これほど遠くからでも射抜いてしまうのかと、遠距離での命中率の高さには恐ろしさを感じる。22口径ライフルでも五十メートル離れた距離の数ミリ幅の標的に九〇%以上も命中するという。これ

が大口径のライフルになると三〇〇メートル先の同じ標的に命中させることができるそうだ。「ライフルスコープという望遠鏡を装着して狙われたらひとたまりもない」という。銃床や、引き金、銃弾に対する知識も満載で、五千発の銃弾を米軍から買って積むと、軽自動車の後部が下がり、米兵が笑うなどのエピソードも銃の現実と結びついて、実感を豊かにさせられる。

ただ、この作品は銃を撃つおもしろさや知識がよく伝わって来てどんどん読み進められるのだが、人間のドラマをどう持ってくるかという点になると、ストーリーの希薄さは否めない。銃の重みはあってもストーリーの重みはない。結末をつけるために、かろうじて当時起きた事件とそのあとの事件を絡めて、なんとか形にしている。プリンス号事件という、少年がライフルを奪って船に乗ったシージャック事件で、周囲に及ぼす危害を恐れて、大阪府警の腕利きスナイパーがスコープ付きの大口径ライフルで一〇〇メートル離れた岸壁から少年の心臓を撃ち抜いたことで終息した。しかしのちに起きた浅間山荘事件では、この残酷な方法を避けた後藤田警察庁長官が狙撃を禁じたことで、逆に警官が狙撃され一人が死亡したことで、対比と皮肉を示して小説を閉じている。ここに人間のドラマが絡んでくると申し分ないのだが、ここまでだと、惜しいが準優秀作に留まる。

「戦場の祖国」(神崎たけし)は、アフガニスタンのタリバンに入る少年の闘いを描く珍しい題材で、アフガニスタンの状況にうまく乗せたストーリー展開は起伏があつてかなりおもしろく読ませる。水を掘って不毛の地を豊かな地に変える日本人の医師も登場して、飽きさせない筋立てである。最後の裏切りとヘリコプターの襲撃もよく盛り上げていてそれなりの力は認めるが、日本との主體的な脈絡をどう付けるかという点で、希薄さを否めない。外国を舞台に書く小説の難しさはここにあり、外国人を外国で主人公にした場合、その主体が日本にどう撥ね返って来るのかあくまで無関係な事件であり現実であるならば、我々の胸には浅くしか入らない。日本人としての主体をどう絡めるかが、大きな課題として横たわっている。

「舟島の決闘異聞」(小泊有希)は宮本武蔵の巖流島の決闘を思いがけない視点から書き起こして、おもしろかった。細川藩による小次郎抹殺事件の背面を仮定して意外性が喚起されるが、やはりつい没入させられるのは決闘シーンである。權を削って小次郎の長剣を超える長さの木刀を作ることから始まって、「ツバメ返し」を破る瞬間の判断が、生死を分ける緊迫感に乗って手に汗を握らせる。その辺りはよく書けていて、つい引き込まれる。書き手は女性に思えるが、時代小説の筆力は感じた。

この号は「スモモ」(波佐間義之)や「ヤマガラ」の里」

(佐々木信子)、「愛のパズル」(緑川すず子)などまとまった小品もそれなりに味を出し、賑わって活気を呈していた。

今回は、興味深い作品、もう少しの作品はあったが、優秀作に強く推せる作品はなかった。その分、興味深い作品、読ませられてしまう作品は多彩だった。まとめたい。

準優秀作 「万華鏡」有森信二(「海」18号)

「狙撃」園田明男(「九州文学」44号)

長篇特別力作「安保物語」松田一宏(「月水金」42号)

